

以上、不敏・非才をかえりみず、誤解による妄評に終始したことを深く著者にお詫び申し上げるとともに、今後の御研究の発展を期待して筆をおくものである。

(A5判 本文三〇一頁 索引八頁 一九七六年十月)

吉川弘文館刊 三八〇〇円

(広島大学教育学部東洋分校教授

森田憲司

昌彼得・王德毅・程元敏・侯俊徳 共編

『宋人伝記資料索引』

台湾の鼎文書局から刊行されていた『宋人伝記資料索引』全六冊が、昨年十二月で完成した。第一冊の刊行は一九七四年四月であるが、序文には、一九六八年から編輯が開始されとあり、九年間の歳月が費された事になる。本文五冊には、四五〇九頁に互って、丁元に始まり樂元に終わる一万五千人(凡例による)の宋人について、その伝記に関する資料が、五百五種の材料から集成されている。まさに、鉅冊と呼ぶに値しよう。

全体の構成は、はじめの五冊が索引本文であり、第六冊には、編者の一人王德毅氏の手になる「別名字号封諡索引」を中心に、付録として、やはり王氏の「宋文集中碑銘伝記資料不著名譯人物彙考」(原載『史原』第六期)・評『宋人伝記索引』(原載『史原』第五期)の二編と、*Harvard Journal of Asiatic Studies* Vol. XXXIV に載った本書の書評(H. C. Tihman 氏)が転載され、さらに、既刊の本文五冊について、二九頁にのぼる「校勘記」が付されているが、ここでは、第六冊については、以上の紹介にとどめ、以下、本文部分について、いささかの私見を述べることにした。

さて、「索引を書評する」とは、如何なる作業なのであろうか。本書にも、単なる誤植から史料解釈に至る、さまざまな瑕瑾が散見する事は確かであるし、それに対する指摘・補正を行なえば、利用者にとって極めて有用な書評となる。例えば、「宋人伝記索引」〔宋史提要編纂協力委員会編 東京 一九六八〕に対する王徳毅氏の書評（前述の如く、本書の第六冊に再録）は、こうしたものの代表と言えよう。本書についても、潘柏澄氏の「宋人伝記資料索引（第一冊）補正」〔『食貨』第四卷第六期〕が存在する。これも、単なるミスの指摘を越えて、一つ一つの項目について、史料に基いて問題点を指摘し、本書の利用にあたっては不可欠のものとなっており、氏の全巻に互る統稿が望まれる。しかし、今既に二九頁もの「校勘記」を含む第六巻を手にし、それ以上に新しいものを付け加えることは筆者の力に余る（潘氏の指摘についても、是非の明白なものは、ほぼこの「校勘記」に採られている）。ここではむしろ、既製の諸工具書と比較しつつ、「この索引ではどこまでが判り、どこからは判らないのか」といった、いわば「使い勝手」を明らかにする、という角度から卑見を述べて、書評としての責めをふさぎたい。本書の性格からして、筆者はこの大冊を通覧したわけではなく、以下に取り上げる諸例も、自分自身の研究上の必要から本書を利用し、その恩恵を受けてきた経験の限りで、目についた点を指摘したにすぎない。

本書の内容を検討していくにあたって、各項目がどのような形式で記述されているかを、読者に知っていただくため、具体的な項目を例として挙げた上で、論を進めていきたい。ここでは、筆者の個人的な関心と、本書の問題点が集中的に発現している、と

いう二つの理由から、『新唐書糾繆』・『五代史纂誤』の二つの著述を残した呉縝（二／一一二七・第二冊の一一二七頁を指す、以下、本書の引用にあたっては、この方式によってその箇所を示す）と、その父呉師孟（二／一一六一）との項目を取り上げる。

呉師孟（1021-1110）、字醇翁，成都人。第進士，累遷鳳州別駕，王安石當國，以與師孟同年生，擢爲梓州路提舉常平，疏言新法不便，寧願罷。後官至左朝議大夫知蜀州，又論茶法害民，遂謝事去。大觀四年卒，年九十。

呉氏族譜（全蜀藝文志 53/4）

宋史翼 1/11 下

皇宋書錄中 /33 下

書史會要 6/20

宋蜀文輯存作者考 /3 下

宋元學案補遺 96/16

全宋詞 1/209

宋詩紀事 25/5

宋詩紀事小傳補正 1/22 下

呉 縝 字廷珍，成都人，師孟子。嘗以朝散郎知蜀州，後歷典數郡，皆有惠政。平生力學，博通古今，有新唐書糾繆五卷，五代史纂誤五卷。

朝奉郎呉縝可朝散郎制（摘文堂集 4/7 下）

書呉縝著唐書糾繆五代史纂誤（歲川歸來集 9/22 下）

新唐書糾繆序（宋蜀文輯存 28/9 下）

宋蜀文輯存作者考 /6 下

先づ第一に、彼等の項目の検索自体が、必ずしも楽では無い。すなわち、一次的には筆画順であるが、同筆画内では、他の多くの類書の如く、「部首↓康熙字典」配列、とはなっておらず、台湾などで時々用いられている、点(・)横(一)直(丨)撇(ノ)方式を採用している(凡例六に説明がある)。我々は、また別種の配列順に悩まされるわけである。特に、「無い事を確認する」という、或る意味では索引の最も重要な利用場面に際して、それが痛感される。この点については、いささか事情を異にするが、同様に特殊な配列をしている『二十四史伝目引得』(梁啓雄主編 北平 一九三六)のように、通行の方式による索引を、せめて設けて欲しかった。ついで乍ら、同じく配列の問題としては、巻頭の「引用書目」も、独特の並べ方となっており、所引書の板本の検索に不自由することがあり、もう一工夫されていたらと望まれた。

さて、この二人の項目の記述は、前頁のようになっていた。まづ注目されるのは、各項目について付されている略伝である。これは、宋人の人名辞典としては、恐らくは『中国人名大辞典』(臧勸蘇主編 北平 一九二一)以来のものであり、収録範囲の広さ、史料の列記等の点で、本書は人名辞典としても、それを大きく越えるものと言えよう。個々の伝記記事が、どの史料に基いているかが、もう一つはつきりしない点で、やや問題を残しているが、厳密なものを求めるとすれば、索引部分に基いて原史料に当り直すべきものであり、あくまでも便宜的なものとして、この小伝は評価すべきものであらう。そして、その限りに於ては、すぐれて有用なものであると言える。

しかし、難点が無いわけではない。呉縝の項を見ると、「有新唐書糾繆五卷、五代史纂誤五卷」という一文がある。この二つはそれぞれに周知の、我々にとって身近な文献である。一方、例えば、鄧至の項(五/三七三〇)にも、「有往事龜鑑、通書、二江集」と見える。しかし、こちらの方は、いづれも現存しない。つまり、本書に於ては、主題の人物の著述に關して、その軼存の區別がなされておらず、はなはだ不便なのである。『増訂四庫全書簡明目録標注』(中華書局編 北京 一九五九)、『現存宋人著述目略』(國立中央圖書館目錄叢刊第七輯 台北 一九七二)等を利用すれば、軼存の明示は、さして手間のかかる作業ではなかった筈である。この点は、単に記述形式だけではなく、本書全体の姿勢にもかかわる問題でもある。伝記史料としての本人自身の著作への軽視が、本書の各部分に於てかなり目につく事は後述する。

次に、索引部分に目を転じて検討を加えたい。従来、宋代史研究のためのレファレンスワークは多いが、この二人の名を、それらで検索すると、吳師孟についての史料が、『宋史翼』(皇宋書錄)(共に『四十七種宋人伝記綜合引得』(哈佛燕京学社引得第三四号 北平 一九三九)以下『四十七種』と略)、『宋詩紀事』(『宋詩紀事著者引得』(哈佛燕京学社引得第一九号 北平 一九三四)、『宋元學案補遺』(『宋元學案宋元學案補遺人名字号別名索引』(衣川強編 京都 一九七四)以下『宋元學案索引』と略)に存在する事が判明するのみであり、續の方に於ては、こうした索引類からでは、その名を見出せない。それ以外は、全く本書によって、初めて検索可能となったものであり(ただし、彼等二人に興味を持つ研究者が、例えば『宋代蜀文輯存』に直接当たっ

てみない筈はないが、その限りでは、まことに有り難い。『東洋學報』第五八卷第一・二号に掲載された、渡辺紘良氏の紹介文は、本書の人名辞典としての性格に重点を置いて評価されているようであるが、筆者は資料索引としての面を重視したいと思う。このように有用な索引部分ではあるが、詳細に個々の内容を検討すれば、事はそう簡単ではない。いくつかの疑問点が、ここにも存在している。

先づ、呉師孟の第一条「呉氏族譜」である。これは、正しくは『全蜀藝文志』の巻五三〇五に、「元費著撰」として収められている「(成都)氏族譜」の「呉氏」の条を指している。従来あまり注目されていないこの史料を取り上げた着眼は敬服するが(この史料の持つ意義については、筆者は近く別に論ずるつもりでいる)、現物にあたってみれば、彼に続いて、息子の子孫についても述べられている事が判る。然るに、前掲の引用によっても明らかかなように、呉績の項では、この史料については、何も触れられていない。さらに、彼等二人を出した「呉氏」について、この「氏族譜」では、七人の名が見えるにもかかわらず、本書では一人(績を含めても二人)しか対象とされていない。煩雑を避けるために、逐一列挙する事は差し控えるが、この事は、同書の他の氏族の部分についても同様である。少なくとも、この「氏族譜」に限っては、そこに見える一人一人についての採否は、はっきり言って不統一であり、そこに編者の意図・規準というものが見出せない。こうした極端な例は、この「氏族譜」についてしか発生していないかもしれないが、しかし、ひとたびこのような事例が見出されれば、他の史料についても、同様の事態が存在している可能性を、本書

を利用する側としては、考えないわけにはいかない。前述の如く、索引というものの最も重要な用途は、「無い事の確認」であると筆者は考えている。その点に於て、この索引の信頼度に対して疑問を抱かざるを得ない。

次元を全く異にし、呉氏とも離れるが、次のような事例も、「有無」の問題との関係で取り上げておきたい。それは、宋元の地方志に見える伝記史料の取り扱いである。宋元方志は、『宋元方志伝記索引』(朱士嘉編 北京 一九六三)や、『宋人伝記索引』等で取り上げられ、本書でも収録の対象とされている。しかし、これらの諸業績を通じて、各方志に含まれる伝記史料の一部分しか採用されていない事に気づく。今、たまたま手許にある『嚴州圖經』(漸西村舎叢刊本)を例にとってみると、この書物からは、巻一の「賢牧」・「人物」の各節から七名の項目を抜き出しているだけのようである。少なくとも、「賢牧」の部分にある「歴官題名」については、該当人物の項をいくつか調べてみた限りでは、本書に見出せない(例、胡寅の名は、『圖經』の巻一、三二裏に見えるが、本書の彼の項 二一/一五六七 には、同じく地方志の『嚴州續志』巻二「賢牧」にある彼の記事の方は、伝記の形式になっているために採用しているが、『圖經』の方は採っていない)。この史料などは、官職自体の重要性を抜きにすれば、『四十七種』に収められ、本書にも引き継がれた『宋中興百官題名』と、その記述内容は同形式のものである。或いはまた、『淳熙三山志』の巻二六〇三二の「人物・科名」の項では、同じ発筆者リストに並んでいる人物でも、父祖・本貫・官歴等の記事の存在の有無で、採否を決めているのは如何なものであろうか(これも、『宋代方

志伝記索引』『宋代伝記索引』のやり方の踏襲であるが。こうした題名類の採用によって、その内容が充実する項目も少なくないと思われるだけに、惜しまれる。

本索引の特長の一つは、文集史料の重視である。単に碑伝行状のみならず、制誥・序記・題跋等々、従来あまり重視されなかつた分野にまで、史料収集のワクを広げた事は、それを逐一検索する手数を考えれば、大変有り難い。しかし、『宋代文集索引』（佐伯富編 京都 一九七〇）に比べてみると、後者は、対象文集の数が僅かであるとは言え、個々の史料の内容にまで踏み込んで項目を採っており、人名に関しても、本書に数倍する量となっている。本書でも、単に史料の題目だけでなく、内容にまで踏みこんでの採集が行なわれていれば、さらに充実していただであらう。

今、佐伯氏の索引の対象以外から一例を挙げれば、元の呉澄の『呉文正公集』は、所引書目に挙げられ（四九卷本）、事実、王安石の項などでは利用されている（一／二七七「臨川王文公文集序」）。このように、元人文集にまで資料収集の対象を広げている点は、他に例が無く、高く評価するのにやぶさかでは無いが、同じ『呉文正公集』の資料でも、曹錫（三／二〇二）に関する「宜黃曹氏族譜序」（巻一八）は、引かれていない。これを利用すれば、本書の彼の小伝では明らかにされていない登第年（嘉定元年）が明らかにした筈である。こうした例は、筆者の経験の限りでも結構目につくようである。

こうした指摘は、煩瑣な記事の増加を求めようというものではない。ただ、「本書に出てこないからといって、載っていないとは限らない」という、単純な事実の確認をしただけの事である。望

むらくは、所引書目あたりに、一つ一つの材料について、「どこを採用し、どこは採らなかつたか」を明示して欲しかった。それさえあれば、「どこまでが判って、どこからは判らないのか」が、明瞭となり、この索引の信頼性は高まったであらう。尤も、本書を一度引いただけで、五百余種の書物を全て検索したのと同じだけの御利益を得ようとする方が、どだい図々しいといわれれば、それまでである（索引とは、そのためにあるのだが）。

再び呉師孟に戻る。次に、第三条の「宋（代）蜀文輯存作者考」に注目したい。本書は、この「作者考」を取り上げながら、『宋代蜀文輯存』本文に於ける、彼の文章の収録箇所については、指示していない。これは、小伝の部分でも問題とした、主題人物の著述について、伝記史料としての価値を、本書が軽視しているという傾向のあらわれのように思われる（『宋詩紀事』・『全宋詞』への注目という一面もあるが）。呉嶺の方に、**『輯存』**の他に、彼の二つの著作の解題を含む『四庫全書總目提要』が、本書の収録対象となっていない事も注目される。**『提要』**の如き明清書の、本書での一般的な取り扱われ方については後述するが、**『提要』**は、本書の索引では見出せない多様な材料（例えば、小説・筆記の類）をも利用して書かれており、その信頼度も一般的に高いため、伝記資料としての価値は少なくないと言えよう。

『提要』に関連して、『四庫全書總目提要辯証』（余嘉錫編 北平 一九三七）が、周煊の項（二／一四五二）では引かれているのに、引用書目に見えないのは奇妙な事であると共に、この書物や**『提要』**の有用性を示していると言える。全面的に利用する必要があったのではなからうか。著述の取り扱いについては、**『提**

要』の他にも、『宋史藝文志』や、陳振孫の『直齋書錄解題』・晁公武の『郡齋讀書志』等の書目類に著録された文獻類についてもそれぞれの著者の項で採用して欲しかった。

本書のような索引の編輯にあたって、対象書目をどのように撰定するかは、編者の最も苦心する点であり、また、特徴の生ずる点でもあろう。本書では、文集史料の重点的な収集等の点から見て、同時代史料の重視に基本方針があるようである。そこで問題となるのは、前述した『提要』を代表とする、明清時代における編纂書の取り扱いであろう。『四十七種』でかなりの比重を占めているこうした書物を、なまじ「見識」を加えずに、そのまま移録されている(凡例八)のは有り難い。しかし、それ以外のものの採否について、十分な検討を加えられたのであろうか。例えば、この呉師孟の場合も、引用を見れば明らかのように、明清の編纂物が、多くを占めている。そして、その個々の内容を検討してみると、『宋史翼』・『宋元學案補遺』・『宋詩紀事小伝補正』それに『全宋詞』の小伝は、『(成都)氏族譜』を利用し、『宋代蜀文輯存作者考』は、『宋史翼』を転用している。一方、『宋詩紀事』の小伝は、『皇宋書録』を引いている。従って、(詩・詞を除けば)これらの史料のうち、オリジナルなものは、『氏族譜』・『書史會要』だけとなる。これに対し、本書では採られていない『天啓成都府志』の彼の伝(卷一八)には、本書に並んでいる史料では見出せない記事があるという、皮肉な事実がある。これなどは特殊な例かもしれないが、明清地方志の全てとは言わないまでも、そのうちの代表的なものや、本書所収の諸書に見えない材料を含む、呉任臣の『十國春秋』、勞格的『讀書雜識』等は、何故収

録されなかったのか、疑問である。

以上、本書の収録範囲の限界を中心に述べてきた。あれが無い、これが欠けている、と全くの「無い無い尽くし」で申しわけがない。しかも、こうした要求を全て満足させようとするれば、その結果は、本書に数倍する大冊となり、それでは、あまりに非現実的な話となってしまう。利用効率の面から見ても、現状は適当なあたりなのであろう。それにしても、一定の欲求不満を禁じ得ないのは、筆者生来の収集癖のなせるわざのみであろうか。

次に、従来存在していた、宋代史研究のためのレファレンスワークと比較して、本書の占める位置は、どうであろうか。一般的に、工具書の網の目が発達している中国学の中でも、宋代史の分野は、特に充実度が高い。引用書目を見れば、こうしたものの対象となっていた書物の多くは、本書でも取り上げられており、特に本書と密接に関連する、『四十七種』と『宋人伝記索引』の二つについては、補正の上で本書に移録が行なわれた事が、凡例(八・九)に明記されている。これで、我々は、一つ一つ配列方式の異なる種々の索引を、イライラしながらひっくり返す労苦から解放された筈である。しかし、それはあくまでも「筈」であって、現実にはそうではない。例えば、本書と『宋元學案索引』と比べてみれば、後者が、学派、人間関係を示すために、単に人名のみの項目についても副出させているのに対して、本書は、それを採用していないため(その事の当否は別にしても)、やはり、我々はこの書物をも検索しないわけにはいかないのである。又、さらに重要且つ不可解な事がある。本書に全文移録された事になっ

ている『宋人伝記索引』と比較してみると、これに引かれている金石書の多くが、本書の引用書目には見えない。しかも、さらに奇妙なのは、その書物が、本文の項目の中では、利用されている事もある点である。例えば、『山右石刻叢編』は、『宋人伝記索引』にあって、本書の引用書目に見えない書物であるが、司馬池（一／四三六）の項では引用され、一方で、『宋人伝記索引』でこれを引用している（一〇五頁）孫繼鄴については、本書の彼の項（三／一九三六）では採られていない、という事態が存在するのである。これでは、もはや不用になった筈の『宋人伝記索引』も、依然として手許から離せないばかりか、ここでも、本書の信頼度に疑問を持たざるを得ない（これは、『宋人伝記索引』との比較という点で、渡辺氏の紹介文が指摘している、碑伝の題目の省略以上に重要な問題ではないだろうか）。この『山右石刻叢編』をはじめとする欠落書の多くは、『石刻史料叢書』（台北 台湾芸文印書館 一九六七）に収められ、原本もさして珍しいものではなく、彼土での入手の困難は考えられない。ついで乍ら、石刻史料をめぐっては、この他にも、各石刻の撰者・筆者は、項目として無視されている事（これは、『著述の軽視』とつながる）、後代の地方志に見える宋代の金石文が、全く無視されている事（明清の編纂書の評価」とつながる）等も、問題となる。

以上、検討を加えてきた問題の原因の一つは、本書が、これだけの歴大な史料の集成であり、その編輯過程で多くの人手を経ているであろうだけに、一つ一つの項目、記事の選択・執筆について、一定の原則貫徹することが困難である事に由来するのではないだろうか。惜しまれるところである。筆者の仄聞するところ

では、編者は既に、本書に対する本格的な補正を計画中とか。その姿勢には頭が下がるが、そこで、今までのような、単なる問題点の羅列ではなく、二つだけなりとも、前向きな提案を示してきたい。

一 各引用書について、どの部分を、どういう基準で利用したのか、を明示する事（これについては前述）

二 略伝や引用史料中に見える人名（主として、父祖・子孫・姻戚）をも含んだ、本書の総合人名引得を作製する事（これについては、『遼金元人伝記索引』（梅原都・衣川強編 京都一九七二）に於て、我々はその有用性を実感している）

こうして、色々と望蜀の言を並べてきた。本書が、「総合的」な宋人の資料索引として、期待される点が多いだけに、期待との食い違いについては、非常に気に掛るのである。或いは、編者の見識に対する誤解による、失礼の言辭がありはしないかと畏れているが、御海容願したい。ともあれ、五百五種の史料から集められた、一万五千名の宋人に関するデータは、それぞれの項目を持つ個別的な問題を越えてやはり、限り無く有益であり、壮観ですらある。人物を軸として宋代史を見ていこうとする時（漢文史料の基本形式の一つが、「伝記」である以上、個々の人物を離れての旧中国研究は有り得ないであろう）、広大な沃野を、本書は我々の前に展開してくれた。これからの問題は、本書を利用する側にむしろあると言えよう。

昨夏来日され、最終巻の膨大な校正刷に取り組み一方で、次の企画である「元代伝記資料索引」の史料収集に励まれていた編者

の一人、王徳毅氏の姿を思い出す。本書の完成に費された編者諸
先学の勞苦に感謝しつつ、又、拙文が次作以降に何等かの益あら
んことを願いつつ、擧筆する。(一九七七・三・三一)

(A5判 全六冊 総五〇九五頁、一九七四年四月と七六年一二月、
臺北 鼎文書局、新臺幣二三六〇元)

(京都大学大学院文学研究科

A. П. Каздан

Социальный состав господствующего

класса Византии XI—XII вв.

井上 浩 一

序

一九五〇年代末から六〇年代前半にかけて、一一世紀以降のビザンツ世界に、西欧の封建制度に極めてよく似た、政治・経済・社会制度を認める史家と、皇帝権の強大さ等ビザンツの特質の連続を強調する史家との間で、国際的な論争が行なわれた。しかしこの「ビザンツ封建制論争」も六〇年代半には立ち消えとなり、以降は個別的な研究テーマがとりあげられた。その中でも目立った傾向として、貴族に関するプロソポグラフィ研究(各家系毎にそのメンバーを確認する。各官職・位階毎にその地位についた人物を確定する)を挙げる事ができる。一連のプロソポグラフィ研究の成果をふまえて、一連の代表的な研究者カシヤタン A. П. Каздан は七四年に、一一一二世紀の貴族に関する画期的な研究を発表した。『一一一二世紀ビザンツの支配階級の社会的構成』である。本書は新しい方法論、明快な結論、興味深い仮説の提起において、近年のビザンツ史研究の白眉といつてよい。以下やや詳しく彼の所説を紹介するのも、この研究の重要性のゆえである。